

文字の還元と記号の生成

中 川 勝 昭

0. 序

言語を「記号」と見なすことは、言語に関する普遍妥当的な観点をとることでもないし、何らかの中立的な立場に立つことでもない。それは、歴史的相対性を帯びた見方に過ぎない。この言語記号観を克服するためには、これまで単に外面的なものとして捉えられていた言語と文字との関係を、認識主観の形成過程における両者の相互作用という観点から捉え直さなければならない。

というのも、言語記号観は、文字というものを或る言語がもつ固有の音的構造の単なる受動的な反映として扱うことで成立しているからだ。しかし、実際には、文字は言語構造を一方的に押し付けられることで成立する媒体ではなく、個別の言語的諸現象を同一の文字の下に凝集し、統合する役割も果たしている。文字は、この役割によって音声を分割し分類するための音声カテゴリー¹を形成し、言語の構造的把握を可能にしているのである。したがって、言語と文字の間には、いわば循環的な相互作用が働いているのである。

以下では、まず、言語を「記号」に変容させるための諸操作について素描し、その後、ソシュールが言語学の対象からの文字を排除しようとしたことの意味を考察する。

¹ 音声カテゴリーについては、拙稿「文字の獲得と音声カテゴリーについて」、九州工業大学情報工学部紀要（人間科学）、第19号2006、13-18.を参照。

1. 「記号」への還元

言語を「記号」と見なす場合、特定の誰かが言った言葉によって指示される特定の対象を問題にするのではない。誰が言ったとしても同じ言葉、そして、それによって表される同一の意味内容を問題にするのである。つまり、この場合、「記号表現」にせよ、「記号内容」にせよ、理念的対象として扱われているのである。それゆえ、言語が「記号」と見なされるためには、いくつかの操作を経る必要がある。

1.1. 記号内容の理念性²

「いす」という言葉の意味は、言うまでもないことだが、「イ」「ス」という音の組み合わせそのものとは全く別のものである。それゆえまず、意味としての「記号内容」と、その音声的表現である「記号表現」とが峻別されなければならない。

また、「いす」の意味は、現実の個別具体的などの椅子とも、さらに想像上のどのような個別的な椅子とも区別される。すなわち、「いす」の意味とは、その現実上あるいは想像上の指示対象とも峻別されなければならない。

「いす」という言葉は、誰が話し手として発したとしても、また、誰がそれを聞き取ったとしても、それが「いす」という言葉が属する言語共同体内での出来事であれば、思念されている内容は同一である。したがって、「いす」の意味は、特定の言語共同体に縛られてはいるものの、その内部においては、使用者が誰であるかということには依存しない。

² 理念性の問題に関しては、野家啓一「フッサー現象学の臨界 - 「意味論的還元」から「解釈学的還元」へ - 」、「無根拠からの出発」、勁草書房 1993, 83-146を参照した。野家はここで、フッサーと、それを受けたデリダの理念性に関する議論を整理し、理念性の三つの段階を区別している。それは、「記号的理念性」・「言語的理念性」・「学問的理念性」である。本稿での「記号表現の理念性」と「記号内容の理念性」はそれぞれ、「記号的理念性」と「言語的理念性」に該当する。

このように、表現媒体・指示対象・話し手・聞き手のすべてが還元され、その残余として抽出されるのが、記号内容の理念性、すなわち意味である。

しかし、上のような操作を経て、記号の意味を理念的対象として取り出してしまうと、表現面のもつ或る重要な機能が忘れ去られてしまう。それは、記号表現のもつ、「シンボル (Symbol)」³ としての凝集作用である。我々は、現実上であれ想像上であれ、様々に異なった材質や様々に異なった形状の椅子を、同じ「いす」として扱い、同一の「いす」という意味へと統合する。もし、「イス」という音声的表現がなければ散り散りのままに留まっていたはずの諸印象・諸経験が、「イス」というシンボルへと凝集することで、こうした統合が可能となるのだ。表現と意味とは元より峻別されなければならないが、その一方で、意味の同一性は表現によって支えられていることを忘れてはならない。記号内容の理念性が抽出されると、その代償でもあるかのように、シンボルがもつ、この凝集作用までもが還元されてしまうのである。

1.2. 記号表現の理念性

「イス」という音声は、誰が発しようと、何度発しようと、「いす」という言葉が属する言語共同体内の出来事である限りにおいて、全く同一の「イス」として認識される。この場合、発声者や状況による音響的な差異は度外視される。すなわち、現実上の、あるいは想像上の「イス」という音声の実質が還元されることで、記号表現の理念性が抽出されるのである。

以上のような操作を経て、「いす」という言葉は、理念的対象としての記号表現と理念的対象としての記号内容との連合的統一体、すなわち記号となるの

³ カッシーラーは、こうしたシンボル機能を果たす媒体を「記号 (Zeichen)」とも呼ぶが、本稿では言語記号との混同を避けるために、この語はつかわなかった。Cassirer E.: *Gesammelte Werke*, Hamburger Ausgabe, Band 11 (Philosophie der symbolischen Formen, 1. Teil), 2001, S.15.

である。

ところで、記号内容を抽出する場合に、記号表現のシンボル機能が還元されてしまうと相関的に、記号表現の抽出は、記号内容が果たす重要な機能を還元してしまう。それは、記号内容すなわち意味の同一性が、記号表現の同一性を担保するという機能である。様々な話し手が、様々な音響的環境の下で「イス」と言ったとしても、同一の「イス」と聞き取られるのは、いずれの場合も「いす」という意味の同一性が保証されているからである。現実上の、あるいは想像上の「イス」という音声は、実際には、決して誰が言っても同一の「イス」ではない。もしそこに意味の裏づけが無いのだとすれば、その音声は、常に、異なる音声として聞き取られるか、あるいは単なる雑音と化す危険に晒されることになる。

比喩的な言い方をすれば、還元前の、実践的な運用の場面では、音声と意味とは、自己同一性の手形を互いに相手に委ねているのである。理念的対象の連合的統一体としての「記号」では、還元の末に相手に委ねていたはずの自己同一性の保証をそれぞれ自分自身のもとへ引き上げてしまう。記号表現は、それ自体の理念的同一性を持ち、記号内容もまた、それ自体の理念性をもつと見なされているからである。

2. 文字の獲得

もし、或る言語が既に表記手段として文字を獲得済みであるならば、上で見てきたような、記号への還元の結果はより一層複雑なものとなる。言語の上に被せられた外皮を剥がしたうえで、上記の操作を行えば、同様の結果が得られるというわけではなくなるからだ。

言語に文字表記を与える場合、意味と音声とが互いに同一性を保証しあう連合体に対して一つの文字を当てはめるのが、最も簡便な方法であろう。しかし、

漢字誕生当時の中国語のような、一語・一音節の孤立語に文字が出会う⁴という幸運は、歴史上稀なことである。

通常、文字の獲得は、音声の分析・分割を前提とする。意味上の同一性の単位は解体され、部分ごとに文字が当てはめられ、表記される。それが、音節レベルであれ、母音/子音レベルであれ、こうして文字を通じて、音声を分割・分類するための音声カテゴリーが形成される。音声がシンボルとしての凝集作用によって意味への統合を可能にしたように、ここでは、文字がシンボル機能を果たして、分割された諸々の音声をそれぞれの音声カテゴリーへと統合するのである。

上で、言葉を「記号」へと還元したように、文字を「記号」へと還元するならば、記号表現に当たるのは、表記の物理的素材を還元した「書かれた文字」の理念的な同一性である。また、記号内容に当たるのは、表音文字を前提とすると、音の実質を還元した部分音声、あるいは同じことになるが、対象化された音声カテゴリーである。

文字を獲得することで、実践で運用される言葉は、意味・音声・文字の三層構造となり、それぞれの層の自己同一性は他の二層の内のいずれかに、あるいは他の二層に重層的に、依存することになる。殴り書きされた「いす」という文字が判読されるのは、意味の理解によって文字表現の同一性が保証されるからに他ならない。また、或る音声が「isu」と転写されるとすれば、意味の同一性が音声の同一性を保証し、さらに後者の同一性が音声カテゴリーによって分割されるからである。

さて、文字によって三層化された言語を「記号」へと還元する場合、まずは文字が還元され、再び二層へと戻される。しかし、この場合、奇妙なことに、

⁴ 河野六郎『文字論』、三省堂 1994, p.12.

文字によって押された音声カテゴリーの刻印は音声にそのまま残され、言語は、単一な意味の同一性と単一な音声の同一性の連合体ではなくなってしまっている。

同じ事態を主観のレベルで言い換えてみよう。一旦文字を習得すると、言語を対象化する際には、その文字習得を通じて得られた音声カテゴリーに第一次的に依拠して言語を見てしまう。言語を「記号」として扱う場合にも、記号表現を既に分割済みのものとして見てしまうのである。

言語学者は、言語を考察するに当たって、まず文字を還元するが、その際、文字を通じて獲得した音声カテゴリーを最初から言語そのものに内在するものと見なし、それを現実の言語認識の過程にも投影してしまう。より具体的に述べるなら、言語学者は、人が文字を一つ一つ同定しながら読んでいく正にそのように、音声の分節化された一つ一つの要素を同定しながら言語を理解すると見なしてしまう。これこそが、言語記号観のもつ含意である。

言語を「記号 (signe)」と呼んだ当のソシュール⁵は、言語そのものを考察するに先立って、まず文字を言語の外へと追いやり⁶、考察から排除しようとした。同じ操作は、明示的に繰り返されることはないが、今でも言語学の前提として暗黙のうちに存在している。しかし、その一方で、文字（主にアルファベット）を通じて身に付けた音声カテゴリーに関しては、無批判のまま受け入れている。言語に対する文字の機能を正当に位置づけ直すことこそが、こうした矛盾した事態の解消につながるであろう。

⁵ Saussure F. de: *Cours de linguistique générale*. Édition critique préparée par Tullio de Mauro, Payot 1972, pp.97.

⁶ *Ibid.*, p.44.